

第191回 全経簿記検定試験 上級 一 会計学一

模範解答

模範解答・予想配点・解説等は、学校法人高橋学園が独自の見解によって作成しており、検定試験実施機関における本試験の解答並びに出題の意図を保证するものではありません。なお、予告なしにその内容を変更する場合がございます。ご理解いただいたうえで、ご利用ください。

問題 1 [完答（正誤および理由）につき各 4 点、合計 40 点]

	正 誤	理 由
1 .	×	売買目的有価証券以外の有価証券の時価が著しく下落したときは、回復の見込みがある と認められる場合を除き、時価評価を行い、当該時価を翌期首の取得原価とする。
2 .	○	
3 .	○	
4 .	×	当該費用については、これを繰延資産として貸借対照表に計上すること ができる。
5 .	○	
6 .	×	連結貸借対照表における退職給付に係る負債は、退職給付債務から年金 資産の額を控除して求める。
7 .	×	有形固定資産の除去に係る将来の支出額を見積り、これを取得、建設、 開発又は通常の使用によって発生した時に負債として計上する。
8 .	○	
9 .	×	連結貸借対照表の作成にあたっては、子会社の資産及び負債のすべてを 支配獲得時の時価により評価する全面時価評価法により評価する。
10 .	○	

問題 2 [丸文字は配点を示す、合計 40 点]

問 1	(a)	回収可能価額	④
	(b)	使用価値	④
	(c)	正味売却価額	④
	(d)	高い	④
	(e)	時価	④
	(f)	将来キャッシュ・フローの現在価値	④

問 2

将来キャッシュ・フローは、資産又は資産グループの時価を算定するためではなく、企業にとって資産又は資産グループの帳簿価額が回収可能かどうかを判定するため、あるいは、企業にとって資産又は資産グループがどれだけの経済的な価値を有しているかを算定するために見積もられることから。	③
---	---

問 3

減損の存在が相当程度確実な場合に限って減損損失を認識及び測定することとしていること、また、戻入は事務的負担を増大させるおそれがあることなどから。	③
--	---

問題 3 (問 1 及び問 2 については解だけではなく計算過程も書くこと) [丸文字は配点を示す、合計 20 点]

問 1	計算過程： $60 \div \{(370 + 430) \div 2\} \times 100 (\%) = 15\%$	解： 15 %	⑥
問 2	計算過程： $320 \div 250 \times 100 (\%) = 128\%$	解： 128 %	⑥
問 3	過剰な当座資産（支払資金）の保有は、それだけ企業として投資先がないことを意味するから。		③